

僧院から仏塔崇拜へ

——新入手の舍利箱銘文によって——

高 橋 堯 昭

何んの変哲もない、茶色古灰色の石製舍利箱。然し斜めに光線が当たると奇妙な凸凹が見える。自然のものでない。意識的に彫ったものらしい。単念に光線を斜めから、横から、そして上方から当ててみると、くっきり文字が浮き出して来る。早速写真をとると、まぎれもない古代インドの文字。つてを求めて斯界の第一人者パリー大学のフスマン教授によんでもらう。教授はフーシェのもとガンダーラ・アフガニスタンの仏教遺跡発掘を手掛け、これらの古代文字の読める数少ない学者である。やがて博士から後述の翻訳をいただいた。一はローマナイズしたもの、更に英訳もつけてくれた。文字はカロシティ文字、言葉はプラークリットとのこと。

A.

- | | |
|--|---------------------------|
| 1. sa(v)atsarayaṣa-viṣavaśasa timae | 5. yauasa rakṣami i |
| 2. maharayasa mahatasa ayasa kalagada- | 6. maharayasa ṅaimitratra |
| 3. -sa aṣad(h)asa masasa divasa mi | 7. vhaṅjao |
| 4. treviśami iṣa divasami | |

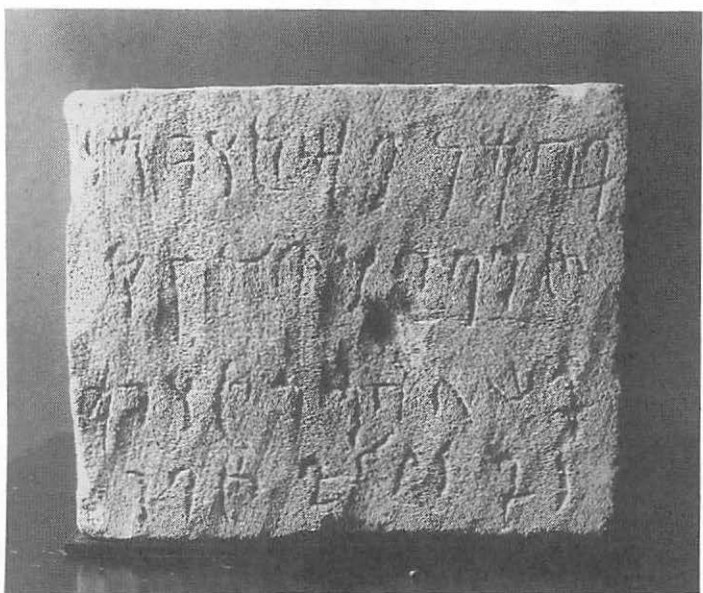
僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

A
仏舎利筒



僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

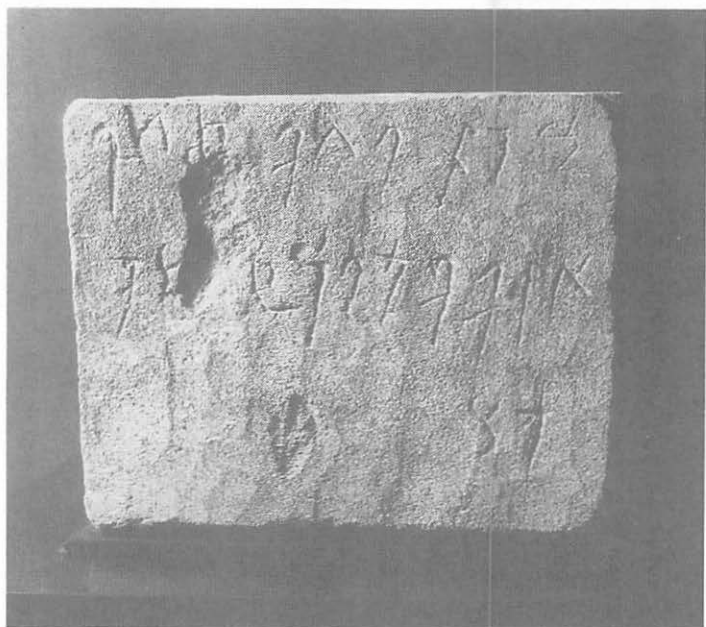
B



僧院から仏塔崇拜へ(高橋)



C



D

僧院から仏塔遺跡群へ(管轄)

B

- 8. i śarira aḍi pradethavida
- 9. pria-vśa(sa)śamaṇasa
- 10. ime ya śarira pradethavi-
- 11. da i danamuhe priava

C

- 12. madapida puyaida
- 13. mahiśadagaṇa airi-
- 14. -aṇa parigrahami
- 15. Śasaśamaṇasa
- 16. Treoraṇiṇyao puyae
- 17. yeṇa io vihare prat(i)ṭha-
- 18. v(i)de-

英 訳

- 1. in the year six and……… ?

- 2. of the late great maharaja Azes
- 3. in the month of Asaḍha. in the day
- 4. 23th. on that day
- 5. (under the protection) of the yavuga (i.e tribe chief)
- 6. ? of the maharaja
- 7. ?
- 8. these corporal relics are here deposited
- 9. by priava (son of śasaśamaṇa) ?
- 10. And these relics are deposited
- 11. This is a gift (priava) ? ś
- 12. Father and mother are honoured
- 13—14. In the acceptance of the mahiśasaka acāryas-
- 15. (of ?) śasaśamaṇa ?
- 16. In the honour of Treoraṇiṇyao (?) by whom
- 17—18. This closter was established

意識すると、アゼス大王の六X年の Asada 月の二十三日、大王の種族の yavuga の priava によって舍利が奉安された。父や母の供養のために、そしてそれは化地部の受領に於てなされた。とある。

私がここでとりあげたいのは、この「化地部の受領に於て」ということである。然もこの舍利箱が収められたからには、この上に塔が立っていたことになる。即ち「化地部の受領」即ち承認に於て塔を建てたということが重要な問題である。

なぜなら、化地部は「僧中に仏有り、故に僧に施さば便ち大果を得、別して仏に施すも（しか）非ず¹」の異部宗論の文字の如く、僧院中に仏があるから、僧院に供養することが仏に供養することで、別に仏塔を建てても功德はないとの立場だからである。

これを裏書きするのが化地部所伝の五分律第二十の次の如き物語りである。即ち「毘舍離の諸々の園の中で第一であるこの園を功德を積まんとして今世尊に奉納したいから、どうぞ御受納下さい」と仏に申し上げると、仏は「僧に施すのが大果を得る道である」と言われた。そこで捺女が再ねて仏に御受納を乞うと、仏は「但、僧に施せ、我も僧数にあれば²」とおっしゃったとある。これは端的に化地部の立場を示している。今この原文を示すと次の如くである。即ち

捺女手自斟酌歡喜無乱。食畢行水却住一面。白仏言。毘舍離諸園觀中此園第一。我修此園本欲為福。今奉世尊。願垂納受。仏言。可以施僧得大果報。捺女重以上仏。仏言。但以施僧我在僧數。捺女受教即以施僧。

更にこのことは化地部に奉獻された碑銘からもわかる。1はブラークリックの影響を受けた梵語で、他はグプタ以前のブラフミー文字である。前者はタキシラ南方の Kura (Salt Range) から、もう一つは遠く南インドのナガー

ルジユナコンダ出土である。何千キロとはなれた遠隔地から出土した両銘文が共に「僧院を供養した」とあって、「塔を供養した」とはない。こゝが注意されねばならない。

(1) Kursa 出土の銘文の大意を述べよう

王中の王・大王・大王・Sa [hi]・jañ [via] なりToramāna の(治世)××年、margasiras 月の白月二日の星宿(naksatra)の下に……………大悲をもつて(洛度したもつ)仏世尊の「仏を上首とする四方の比丘僧伽(buddha pramukha-caturdisē bhikṣuṅgaha)に對する寄進として、僧院(vihāra)が建立された。……………一切衆生が無上智覺(anuttarajñāna)を獲得せんことを、この僧院の施与(vihāras-yopakaraṇa)は四方僧伽に對して化地の部の所領としてなされた。(傍線、筆者)

(2) ナガールジュナコンダの銘文は以下である。

成就あれ、世尊等正覺者に歸命す。Tkhāka (IKṣuvaku) (家)の大王 Vaseṭhiputa Siri-Ehuvāla- (cāta) mūla の十一年、××第一半月七日、IKhaku の大王 Vaseṭhiputa Siri Catamūla の孫娘じ……………が、化地部(mahāsaka)の諸師の所領として、四方僧伽に對して、一切衆生の利益安樂のために、柱(khānyā)と僧院(vihāra)を建立した。(この造管工事は)大説法師(mahadharmā-kathika)たる軌範師(acariya) Dharmma(gho)sa 上座(thera)によりて遂行された。(傍線、筆者)

このナガールジュナの銘文で注意されねばならないのは、軌範師の指導のもとに建立されたのが僧院や柱であつて塔でないことである。

従つて化地の部の律や所伝の經典に則つて行われたからである。銘文中の「仏を上首とする四方の比丘僧伽」の言葉

が「僧中有仏」の立場を示している。

又、H. Sarkar の "Some aspect of the Buddhist monument at nagarjunakonda" ⁽⁵⁾ 「化地部の僧院と二ヶの塔から出来ている遺跡が、西山部・多聞部・分別説部の僧院跡と比較して違ふ所は Caiya-grha や仏像安置の祠堂を僧院区内にもっていない所だ」と述べていることが「僧中有仏」のこの派の立場をはっきり示している。然し仏塔が僧院外にでも、二つあることはどうしたことであろう。さだめし仏塔供養が在家の間に隆盛になると、「仏塔供養功德果少論」は表向き、特に出家向けで在家信者には仏塔信仰を許さざるを得ない情況になって来た為のものと筆者は推測するのだが、如何なるものであろうか。もしこの推論が許されるものなら、筆者の入手した銘文入り舍利箱も（この上に塔が建てられていたから）、こつした仏塔崇拜の流れを反映していると考えられるからである。

勿もこの舍利箱の塔が後述の Kalawan のように、僧院外に建てられていたものか、Pippala や Dharmarajika の僧院中の塔 M 5、E 1、E 2 の如く僧院内に建てられていたのか知る由もなく、その出土地も分らない。唯、ペンシャルの骨蒸商の店にあったものを英国人が買って日本に持ち込んだと伝えられているだけであるから。

筆者は箱の中の石を削って石質を調べるとガンダーラ北方或は周辺に出土の多い緑色がかった灰色のものである。前述の如くタキシラ南方のクラに化地部があったし、玄奘はカピシで「この国には大乘の僧求那跋陀があり、薩婆多部（説一切有部）の僧阿黎耶代摩、弥沙塞部（化地部）の僧求那跋陀があり、みなカピシの国の第一人者だった」と慈恩寺法師伝に伝えている。又高僧伝に五分律の訳者仏駄什は「嚴實の人、小にして弥沙塞部の僧に受業す」とも訳されているから、この西北インドに化地部があったことは十分推測される。

更に異部院論に「法蔵部本宗同義。謂仏雖在僧中所攝。然別施仏果大非僧。於窣堵波興供養業獲広大果」、又異

部宗輪論述記卷中八に「法蔵部……既に化地部の本旨にそむき遂に部分かる」とある。法蔵部の銘文は Linders に よるが、Jamalgarhi の Corst. No. 7 で発見され、マトウーラから二つ発見されている。マトウーラ出土のものは共に菩薩像の銘文である。大乘と見間違ふような菩薩像とか、四分律には後述の「欲取大乘」の大乘の文字がくり返されたり、「能供養爪髮者。必成無上道。」と大乘と見間違ふが如き文字を見る時、「僧中有仏」の化地部から袂を分つて独立したことがわかるような気がする。従つてジャマールガリからマトウーラ間の法蔵部の寺から余り遠くない所。やはりガンダーラのどこかに、この舍利箱の祀られていた塔があつたに違いない。

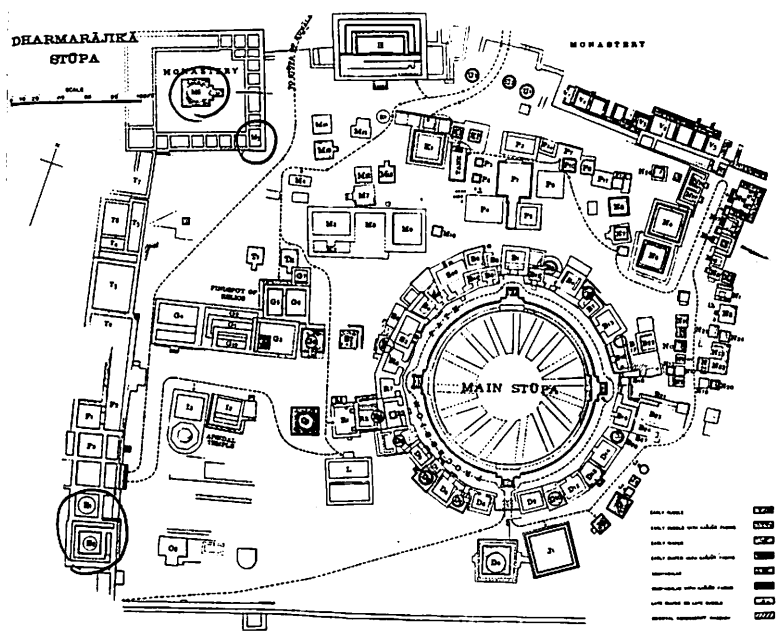
いづれにしても、「僧中有仏」の僧院中心の化地部が、仏塔信仰の流れに抗し切れなくなつた時代相がこの舍利箱でよみとれるように筆者には思われてならない。



そうした僧院中心の考え方から仏塔への関心が深まり、Jamalgarhi や Dharmarajika 等の如く僧院より仏塔が巨大となり、且つ又僧院が塔のまわりに作られて来るようになって来る。

パーリー上座部は「僧伽に施せば大果がある」の立場に立っていたが、やがて仏塔供養を功德あるものとして信者にすすめたが、然しそれは生天の功德をうるだけのもので、涅槃や悟りを得ることは出来ないと考えた。又仏塔の経営は在家で、現在でもビルマなどでは在家信者が「委員会」を作つて経営し、比丘は直接関係しないのは十誦律等に表れている思想の延長上のものであろう。即ち、十誦律には「塔物無尽とは毘耶離の諸估客は塔物を用いて翻転し、利を得て塔を供養せり。是の人、利を求むるが故に、遠処に到らんと欲す。此の物を持ちて比丘に与えて言ふ、「長

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)



1. ダルマラージカ大塔

老よ、これは塔物なり、汝まさに出息して利を得しめ塔を供養せよ」と比丘に寄託した。このことはそれまで商人が塔物を無尽して経営していたことを証明している。

更にこのことは舍利弗の舍利塔についても言える。釈尊より早く亡くなった舍利弗の舍利をアーナンダが供養していた。給孤独長者はその舍利をほしいと願い出たが、アーナンダが承知しないので釈尊に願い出ると、釈尊はアーナンダに、「梵行者の遺骨に供養するよりも如来に供養する方が大切だ」と長者に与えるようさとした。舍利を得た長者は家に持ち帰り供養していたが、余り大勢来るので門をとじてしまった。それは高くて見晴しのよい所(顯敞之処)にストウーパを建てて人々におまいりさせる為であった。そして長者はストウーパの作り方を釈尊に問うた……という。この話も在家が舍利を祀り、又家の中であつた舍利を屋外に建てて祀つたということは、

僧院中にあつた仏塔が、僧院外に祀られ、出家在家共に祀って行ったプロセスが暗示されているように思われてならない。そして又過去仏たる迦葉仏の塔については各部派の律で同じように述べられているから、玄奘の大唐西域記中隨所に述べられているように、この過去仏の塔は数多く祀られていたに違いない。

これを律感からみると、

摩訶僧祇律第三十三

爾時波斯匿王往詣仏所。頭面礼足白仏言。世尊。我等為迦葉仏作塔。得作龕不。仏言得。過去世時。迦葉仏般泥洹後。吉利王為仏起塔。四面作龕。¹⁷⁾

とか、又

塔池法者。仏住舍衛城。乃至仏告大王。過去迦葉仏般泥洹後。吉利王為迦葉仏塔。四面作池。種優鉢羅華波頭摩華拘物頭分陀利種種雜華。……

塔枝提者。仏住舍衛城。乃至仏語大王。得作枝提。過去迦葉仏般泥洹後。吉利王為迦葉仏塔。四面起宝枝提。彫文刻鏤種種彩画。今王亦得作枝提。有舍利者名塔。無舍利者名枝提。¹⁸⁾

仏住拘薩羅國遊行。時有婆羅門耕地。見世尊行過。持牛杖住地礼仏。世尊見已便發微笑。諸比丘白仏。何因緣笑。唯願欲聞。仏告諸比丘。是婆羅門今礼二世尊。諸比丘白仏言。何等二仏。仏告比丘礼我当共杖下有迦葉仏塔。諸比丘白仏。願見迦葉仏塔。仏告比丘。汝從此婆羅門。索土塊并是地。諸比丘即便索之。時婆羅門便与之。得已爾時世尊即現出迦葉仏七宝塔。高一由旬。面広半由延。¹⁹⁾

四分律第五十三

爾時世尊在二拘薩羅國。与千二百五十比丘人間遊行。往都子婆羅門村。到一異処。世尊笑。時阿難作是念。今世尊以何因緣笑耶。世尊不以無因緣而笑。偏露右肩。脱革履。右膝著地。合掌白。仏言。世尊。不以無因緣而笑。向者以何故而笑。願欲知之。仏告阿難。乃往過去世時。有迦葉仏。般涅槃已。時有翅毘伽尸國王。於此処七歲七月七日起大塔。已七歲七月七日与大供養。坐三部僧於象陰下。供第一飯。時去此処不遠。有二農夫耕田。仏往彼間。取一搏泥來置此処。

弥沙塞部和隨五分律第二十六

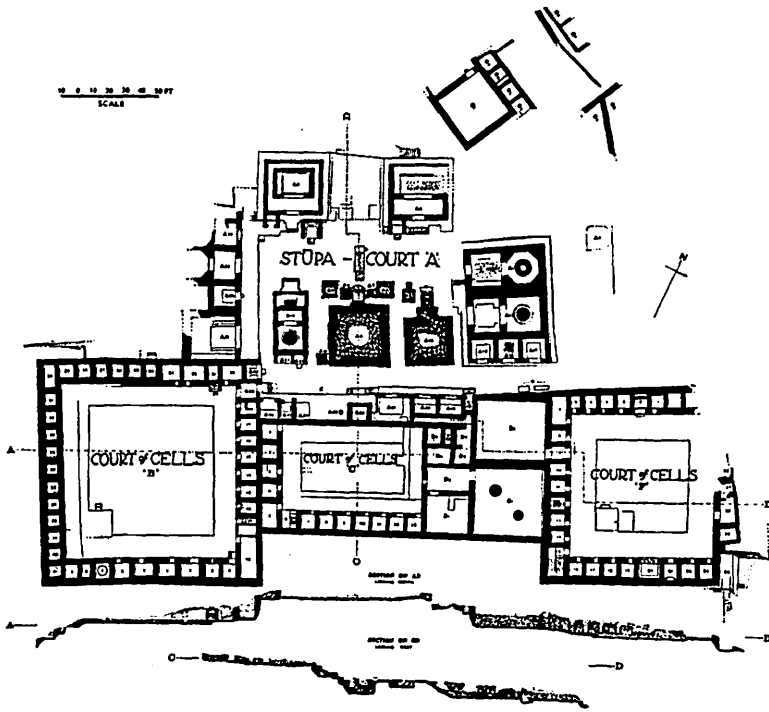
仏在拘薩羅國遊行人間。与大比丘千二百五十人俱。到都夷婆羅門聚落。在道側娑羅樹下敷座坐息。仏便微笑。阿難作是念。諸仏不以無緣而笑。今仏微笑必有因緣。即……

仏告阿難。彼迦葉仏般泥洹後。其王為仏起金銀塔。縱広平由旬高一由旬。累金銀整一一相間。今猶在地中。仏即出塔示諸四衆。迦葉仏全身舍利儼然如本。仏因此事取一搏泥。而說偈言。雖得閻浮檀。百千金寶利。不如一團泥。為仏起塔廟。

說一切有部毘奈耶藥事卷十二

是時世尊。告貝壽阿難陀曰。汝來可詣都異迦城。聞教隨仏。至彼城所。有一婆羅門。而為耕墾。遙見世尊具三十二大丈夫相。広如余説。作如是念。我若往礼沙門喬答摩者。靡此事業。若不往礼。失諸福利。令事不靡。使獲福利。執鞭耕犁。遙言敬礼敬礼。仏告貝壽阿難陀。彼婆羅門。自招錯咎。而於此処。有迦攝波如來全身舍利。儼然無損。若來我所。恭敬礼拜。彼便致敬二仏世尊。是時阿難陀速整衣服。合掌白言。唯願世尊。就此而坐。其地則為二仏受用。仏告諸苾芻等。衆見迦攝波如來正等覺全身舍利不。

KALAWAN



Plan of stūpās at Kalawan.

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

PLATE 72

2. カラワン僧院と塔

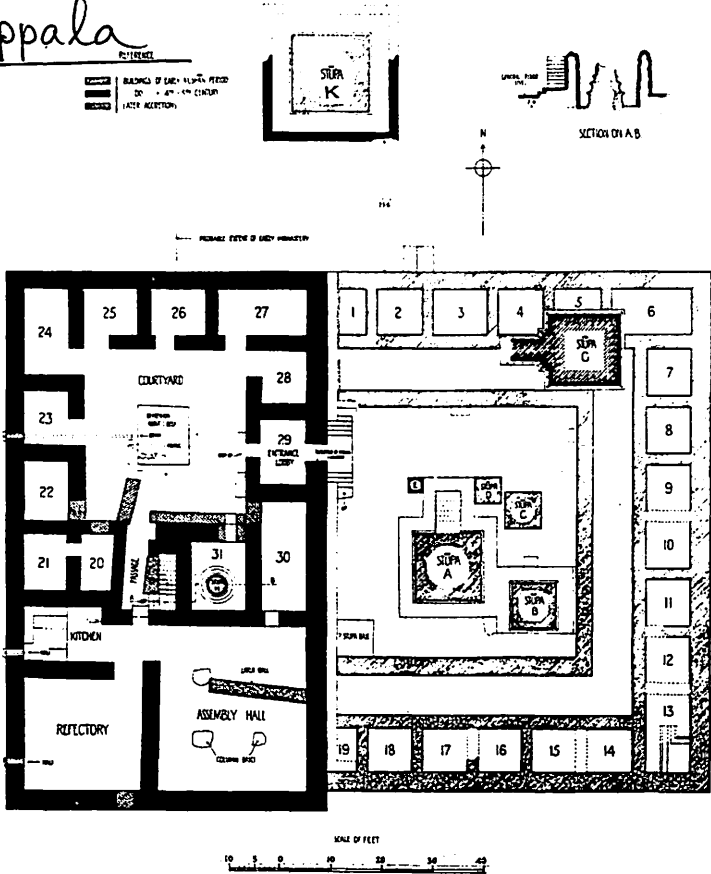
以上のように各派で然も同じような表現で迦葉仏の塔に言及し、釈尊との二仏一体を述べている。然も各部共通に同じ表現で背の高い塔や塔に対して泥団子でもまごころをもって供養しなければならぬ即ち物より心ということが書かれている。これも仏塔崇拜の盛んになる時代性を反映しているとも考えられよう。



然して遺跡に於ける僧院と塔の構成関係をみると、二つのタイプが見られる。即ち(A)僧院と塔とがはっきり分れているもの。現在の遺跡としては Kalawan・Giri として Jamal-Garhi がある。これに対して(B)としては僧院中に仏塔の建てられたものがある。Pippala

Pippala

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)



3. ピツバラ僧院と塔

や Dharmarajika の主塔西北コーナーの僧院内庭中央の塔 M6と僧院一室内の M5、E1、E2である(図4参照)ピツバラはパルティア期から早期クシヤン時代に作られ、四、五世紀にこの塔は壊され、その跡に僧院が建てられた⁽²⁴⁾。又後者もやはり“rubble and semi-shlar”の石積みでAD2世紀の部屋にあった⁽²⁵⁾。こゝうした僧院の部屋に

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

ある塔は mora-moradu の僧院の一室に現在も小塔があって、(オリジナルはタキシラ博物館にあって現地にあるものはイミテーション) 前二者と規を一にする。更に Dharmarajika の寺自体、主塔をかこんで僧院が作られているから、僧院中の仏塔の大規模なものと言えよう。(図2参照)

これらを小乗の律から見ると、各部派によって、塔に対する態度が異なっていることがわかる。

(A) 僧院以外にあったものとして、

1、前述の釈尊が微笑されているという摩訶僧祇律三十三の話は、農夫が耕していた場所からしても明らかに僧院外のことである。

更に同じ摩訶僧祇律第三十三の

起僧伽藍時。先預度好地作塔処。塔不得在南不得在西。应在東应在北。不得僧地侵仏地。仏地不得侵僧地。若塔近死尸林。若狗食残持来汚地。应作垣牆。应在西若南作僧坊。不得使僧地水流入仏地。仏地水得流入僧地。

塔应在高頭処作⁽³⁶⁾

とあり、これを裏書きするように、義浄は南海寄帰内法伝に「大衆は門を出でて塔を繞ること三匝……次第に歸つて寺中に入り、常に来る処に至る⁽³⁷⁾」とあるから、ナーランダでは僧院と塔が分けられていたのであろう。

(B) として僧院中に塔が出来たという系統は如何であらうか。

(1) 十誦律と同系統の「薩婆多毘尼毘娑沙第三に」

若四方僧地不得作塔。不得作別波演。若作得罪。亦不得四方僧地中為仏法自為種。若僧和合。聽四方僧地中作塔得作。若不和合不聽不得作。若僧地中有種種花。应淨人取。作次第与僧隨意供養。不得私取自供養三宝。若

花多衆僧取不能尽。若僧和合。聽隨意取之。

とあるから僧衆が話し合いでゆるされれば四方僧地中に建てられたからピツバラヤダルマラージカのような塔が出来たのであろう。

(2) 根本有部毘奈耶雜事では給孤独長者が如來の塔を作することを仏に許しを得ている。即ち

仏言如世尊住法處中。應安大師制底。諸大声聞。應在兩邊。余尊宿類。隨大小安置。凡夫善人。應在寺外。

如來の塔を真中に諸聲聞の塔は兩邊に、余尊宿類は大小に従って安置、凡夫善人の塔は寺外に置けとあるから、如來の塔等は僧院の中にあつたことがわかる。

(3) 四分律では客比丘が寺内に入ろうとしたと、仏塔、聲聞塔、或は上座の塔があるのをよく注意しろと言っている。即ち、

四分律卷第四十九

若客比丘欲入寺内。應知有仏塔若聲聞塔若上座。

彼先應禮仏塔。復示聲聞塔。四上座隨次禮。彼捉脚脛。禮不禮。捉脛禮。彼反抄衣。纏頸裏。頭通肩。披衣著革履。作禮。仏言。一切不禮爾。自今已法。偏露右肩。脫革履。右膝著地。捉兩脚。如是言。大德我禮。若

四上座在房內。思惟。應隨坐次房。彼應問。何處是衆僧大食處。小食處。夜集處。說戒處。何者。とか、又

此是大便處。此是小便處。此是淨處。此是不淨處。此是仏塔。此是聲聞塔。此是第一上座房。此是第二第三第四上座房。此是衆僧大食處。小食處。夜集處。布薩處。(傍線筆者)

と寺内にあるものを紹介している。

更に興味あるのは僧がよい部屋に居住して、仏塔をそれ以下の部屋に安置してはならない等指導しているから前述のダルマラージカ僧院内M5等の如き塔が存在していたことがわかる。即ち

四分律卷第五十二に

仏言不_レ応_レ爾。必_レ令_二淨者持_一。彼安_二如来塔_一置_二不好房中_一。已在_二上好房中_一宿。仏言不_レ応_レ爾。必_レ安_二如来塔_一置_二上好房中_一已在_二不好房_一宿。彼安_二如来塔_一置_二下房_一已在_二上房_一宿。仏言不_レ応_レ爾。必_レ安_二如来塔_一在_二上房_一已在_二下房中_一宿。彼共_二如来塔_一同屋宿。仏言不_レ応_レ爾。彼為_二守護堅牢_一故。而畏_レ慎_レ不_レ敢_レ共_レ宿。

以上諸種の律からみると仏塔が僧院内にあったことがわかる。然もこれはダルマラージから出土した「Taxila silvers croll Inscription of the year 136—(聯合目錄1788)」に示されているように、「Urasaka」というバクトリヤ人がダルマラージカ塔にある『自分の菩薩窟(Boddhisattva-grha)に仏舍利を奉安した』という銘文そっくりである。従って僧院内に仏塔があったことは事実である。然し化地部や法蔵部は「僧中有仏」の即ち僧院の中に仏陀が居られると主張する立場だから、四分律等に僧院に仏塔があると記されているのも不思議ではない。

然し不思議なのは、前記マーシャルの名著「Taxila」等からみると、僧院内の仏塔は2世紀頃まででその跡に僧院が増築されたり、或は部屋の中の塔もとり除かれて僧宅や倉庫になり、塔は摩伽僧祇律の記述引用の註26の如く塔は僧院の外に建てられて行くのはどうしたわけであろうか。私の仏塔巡礼の際、常に考えて来た大きな問題である。



そもそも僧院と塔とは、その起源と系統を異にする。大般涅槃經の「阿難よ、汝等は如来の舍利供養に奉仕してはならない。いざ阿難よ、汝等は『最高善 Sadattha』のために努力せよ。最高善を實踐せよ。最高善において、不放逸に、熱心・努力せよ。阿難よ、如来に信心厚き刹帝利の賢者、婆羅門の賢者、居士ありて、彼等が如来の舍利供養 (Saraṅgīla) をなすであらう」の遺囑によって僧は舍利供養にかかずらなかつたことがわかる。為にラジギールのギバ尊者の僧院のような最初のものには仏塔が存在しなかつた。在家の人々は僧院とは別に塔を建てて釈尊を追憶思慕した。しかし時代が過ぎるに従つて、去るものは美しく崇高に感ずる人間の心情によって、釈尊思慕の情はますます大きくなる。このことはバイシャリーの塔が幾重にも増巾されて行つたことでもわかる。

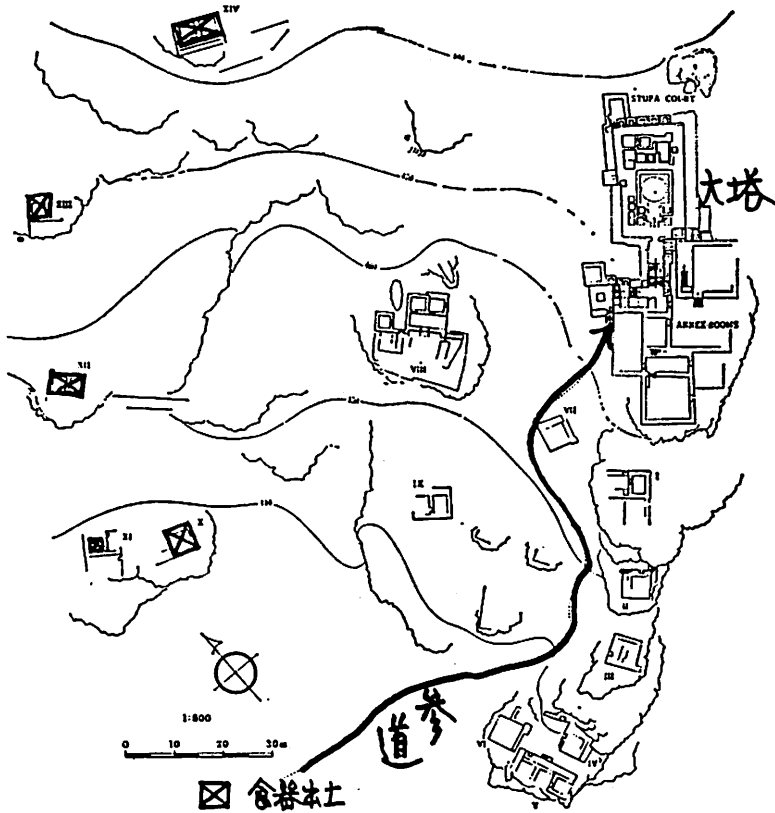
こうした祖師追慕の情は僧の間にも大きくなって来る。それに加えて塔が墳墓から段々釈尊自体の人格の表現になって来るのは自然の情勢である。特に仏教が広まって、舍利弗や目連の如きエリートだけではなく、一般の人が僧になるに及ぶと、悟らんとして努力すればする程、悟りより遙かに遠い自己を見せつけられ、人間の弱さ、愚かさに泣く。こうなつて来ると、釈尊にすぎり、祈る立場が序々に出て来る。サンチーやパールフットの塔の建設に僧の寄附が非常に多くなつて来たのは単なる釈尊への思慕追憶に止らず、こうした救済を祈る心情が出はじめた証拠と筆者は考えている。

こうした「祈り」の傾向によって、「僧中有仏」の立場の小乗仏教では、僧院内庭中央に祀つたり、又僧達の協議によつて上室に(前述の律)祀られて来る。これがピツパラ僧院中央の塔であり、ダルマラージカの M5E1・E2 の諸塔である。

僧院の中に塔が祀られると、僧院外に仏塔がない場合、人々は僧院の中にまで許可を得ておまいりに来る。これは

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

メハサンダ

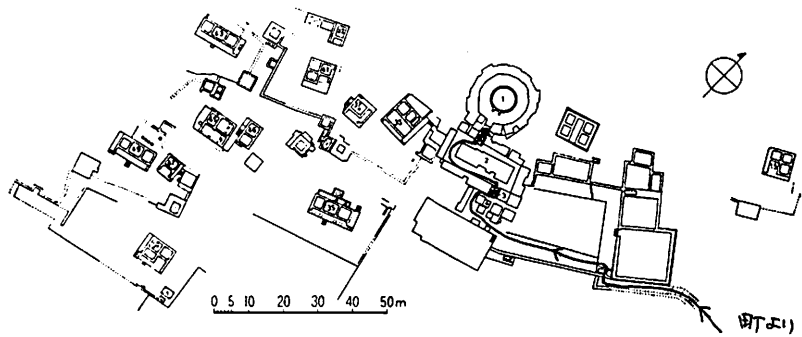


僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

4. メハサンダ僧院と塔

僧院生活をさまたげ、僧の修行の邪魔になる。こうした情況を示したのが前述の如く根本有部毘部毘奈耶雜事卷十八の「舍利弗の舍利を家に祀った給孤独長者が、余り大勢お詣りに来るので、門を閉じ、やがて門外の『頭敵処来に塔を建てて祀った。』という文章であると思う。

僧院外の高頭所に建てるようになると、僧も在家も共に詣でるようになる。この一例がメハサンダであり、ジャマールガリであると思う。特に布施太子の故地といわれるこのメハサンダは麓の町から僧院



5. ジャマール・ガリ僧院と塔

のそばを通って主塔に登る階段があり、尾根に並んで建てられた僧院の僧もこの主塔を詣でるような構造になっていて、僧院内には仏塔はない。この構造の典型的なのがジャマールガリである。

山頂に建てられた仏塔には仏像や奉獻塔の林立する祠堂内を通して登り降りするが、僧院はまわりの別な所に作られている。明らかに在家信者が僧院の生活を乱さないようにとの心使いが感ぜられる。且つ又僧院居住の僧もこの主塔に礼拝したのは勿論である。かくて塔は僧俗の信仰の中心となった。

こうした仏塔崇拜が盛んになって来ると、ますます仏塔は積尊そのものから救済者積尊、超越者積尊になって行く。為人々は仏塔に自己の幸福と来世の極楽(厳密には天上界)への再生を祈るようになる。これが「ミトナ像」や「怪獣殺生像」が仏塔に祀られるようになる由縁である。⁽³⁶⁾

そして思想的にも、

四分律卷第三十一

「賈人当_レ知_レ字_レ菩薩道_二能供爪髮者必定無上道。以_二仏眼_一觀_二天下_一。無_レ不入_二無余涅槃界_一而般涅槃_也」。

や又、「海龍王宮に行つて如意珠をとつて来て閻浮提の衆生を貧苦から救おうとして行く」と五百の羅刹女が問うに、『何乗をとらんと欲するか』という。そこ

で『大乘を取らんと欲す』と三辺も四辺も答える⁽³⁸⁾。このような言葉が出るように、法蔵部は大乘と変らないものとなつて行く。否々、こうした「閻浮提の大衆の貧苦を救わん」との大乗的表現が律の中に出て来る風潮が世の中に充満して来た。

そうした風潮の一つが大乗として成立し、部派も又そうした流れをうけて変容して行つたのではあるまいか。要するに僧院中心の立場から、別系統の仏塔信仰の中に僧俗の関心が移り、人間釈尊を超越者・救済者として塔を祈る方向に進んで行き、悟りの仏教から祈りの仏教へ即ち僧院から仏塔へと信仰の変容が行われて行つたと考えられる。



新入手の舍利箱碑銘を資料として、僧院と仏塔のかかわりを考察して来た。然しこの問題は余りにも大きく、大膽に推測出来るような生易しい問題ではない。然し、筆者は今までのパキスタン・アフガニスタンの遺跡探訪による仏塔と僧院のあり方から、敢て一応の推論を試みたものである。

〔註〕

- (1) 大正大藏經 四九卷 一七頁上 以下略す
- (2) 大正一一三六上
- (3) 静谷正雄 小乗仏教史の研究 一六七頁及、静谷目録 No.八五
- (4) Vogel, E. L. *XXI* 24F. H, 静谷目録 七〇八
- (5) *Ancient India* NO. 16 (1960) P69
- (6) 大唐大慈恩寺三藏法師伝 長沢和俊訳 玄奘三蔵 五二頁

- (7) 大五〇―三三九 a
- (8) 大四九―一七上
- (9) 国訳大蔵経・卷四四頁 異部宗輪論述記 卷八
- (10) 静谷正雄 小乘仏教史 一九二頁
- (11) 静谷目録 No.六四八と静谷・小乘仏教史一九〇頁の訳文のマトゥーラの法蔵部碑銘
- (12) 大二二―九〇八上中 四分律四七
- (13) 大二二―七八五 四分律三一
- (14) マーシャル タキシラⅢ plate 45 より
- (15) 大二三―四一五下
- (16) 大二四―二九一上中下 根本有部毘奈耶雜事卷一八
- (17) 大二三―四九八上
- (18) 大二三―四九八中
- (19) 大二三―四九七中
- (20) 大二三―九五八上
- (21) 大二三―一七二上
- (22) 大二三―一七二下
- (23) 大二四―五三上
- (24) marshall Taxila I P365
- (25) ⇨ P291
- (26) 大二三―四九八
- (27) 大二四―一二七
- (28) 大二三―五二一中
- (29) 大二四―二九一上下
- (30) 大二三―九三〇下

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

僧院から仏塔崇拜へ(高橋)

- (31) 大三一九三—中
- (32) 大三一九三—下
- (33) 大三一九五七—中下
- (34) 註24、25の如く、marshall Taxila I の文參照
- (35) mahaparimbhavana-suttanta Vohll II P141
- (36) 印度佛敎學會 No.40—2号 P.22—29
- (37) 大三一七八五—下
- (38) 大三一九〇八—上中